



月刊

2017

6
119

みんな



特集

沖 守弘 インド写真 データベース



データベースの成り立ち 三尾稔
写真家沖守弘の足跡 五十嵐理奈
インドを撮る 小西正捷
沖氏の写真がとらえたもの 三尾稔
沖守弘インド写真データベース活用法 三尾稔
ラクダ部隊と「小学生新聞」 上羽陽子



Photo by F.M.Oki

インドで田舎旅

蔵前 仁一

プロフィール
1956年鹿児島県生まれ。慶應義塾大学卒業。1980年代からアジア、アフリカなど世界各地を旅し、1986年『ゴータ・インド』（凱風社）を出版し旅行作家となる。1995年、出版社旅行人をたちあげ、雑誌『ガイドブック、紀行書』などを発行。主な著書に『わけいても、わけいても』、『インド』、『よく晴れた日にイランへ』（いずれも旅行人などがある）。

ここ数年、インドへ行くと田舎ばかり旅している。目的は、村の家々の壁に描かれた絵を見ることだ。奇しくもこの号で特集されている沖守弘氏が、長年にわたって取材されてきた壁画がそれである。氏の写真をご覧くだされば、その美しさをよくご理解いただけると思う。僕は氏のあとを追うように、村々をめぐって壁画を拝見している。

このような壁画は観光地で一般公開されているわけではないので、あらかじめ壁画がどの地域にあるか調べ、あとは現地を探すしかない。それが大変なときもあれば、わりと簡単に探し出せることもあり、まさに運次第だ。

僕は研究者でもなく、写真家でもないのですが、このような壁画探しはあくまで旅の一環である。だから、壁画探しという口実で田舎を旅しているといってもいい。壁画が見つからなくても大きな問題はなく、ちよつと残念な気分になるだけだ。だから、探し方もいいかげん。あらかじめ本やネットで探した壁画をプリントアウトし、現地に行つてそれをホテルの人や観光案内所など、さまざまな人に見せて、「こういう絵があるところを知りませんか？」と尋ねるだけである。

現地の言葉も話せず、そんなことで探し出せる

のか？ と疑問に思う方もいらっしゃるだろう。

これが意外に探せるのだ。わざわざ誰かに尋ねなくても、向こうの方から話しかけてきて、「あなたは日本人か？ 中国人か？ ここへ何しに来たんですか？」と聞かれることがしょっちゅうある。観光地でもないところへ外国人が来るのは珍しいので、外国人というだけで注目を浴びるので。

そこで、壁画のプリントを見せて、これがどこにあるか知らない？ と聞く。もちろん知らないことのほうが多い。このような壁画はインド先住民の文化であり、一般のインド人はあまり興味を持っていないのだ。

だが、そこは面倒見のいい人の多いインド。携帯電話を取りだして、日本人が来てて、これこれの絵を探してるんだけど誰か知らないか？ という具合に探してくれるのだ。

僕の経験からいうと、これでほとんど探しあてることができる。誰も知らなければ、そこにはないと判断してほぼまちがいない。

お目当ての壁画があつてもなくても、インドの田舎旅は、このような人々に支えられて、穏やかにのんびりと楽しむことができるのである。

月刊 みんなぱく

6月号目次

- | | | | |
|----|---|----|---|
| 1 | エッセイ 千字文
インドで田舎旅
蔵前 仁一 | 12 | みんなく Information |
| 2 | 特集 沖守弘インド写真データベース
データベースの成り立ち
三尾 稔 | 14 | 想像界の生物相
ナワル
鈴木 紀 |
| 4 | 写真家沖守弘の足跡
五十嵐 理奈 | 16 | 新世紀ミュージアム
ラウテンシュトラウフ = ヨスト博物館
山中 由里子 |
| 6 | インドを撮る——写真家・沖守弘の冒険
小西 正捷 | 18 | 手芸考
編み込まれた記憶
——バブアニューギニアの網袋製作から
新本 万里子 |
| 7 | 沖氏の写真がとらえたもの
三尾 稔 | 20 | ながなんちゃ
意味か？ 音か？
稲澤 努 |
| 8 | 沖守弘インド写真データベース活用法
三尾 稔 | 21 | 次号予告・編集後記 |
| 9 | ラクダ部隊と「小学生新聞」
上羽 陽子 | | |
| 10 | 〇〇してみました世界のフィールド
済州島と在日済州人の過去・現在・未来
永田 貴聖 | | |

特集 沖 守弘 インド写真 データベース

データベースの 成り立ち

三尾 稔 民博グローバル現象研究部

データベースには沖氏が一九七〇年代

半ばから二十年間にわたってインドおよびネパールで撮影した写真およそ二万点が収められている。一九七〇年代半ばといえど日本から海外への渡航者数が年間で百万人を越えはじめたところで（二〇一五年の海外渡航者数は一六二万人）、インドを訪れる日本人はまだ非常に限られていた時期である。

沖氏がインドに関心をもつようになったきっかけや取材対象の広がりについて



アーンドラ・プラデーシュ州の影絵芝居。撮影1990年代前半。（『知られざるインド 儀礼芸能とその造形』所収） [X0308388] Photo by F.M.Oki

写真の受け入れが打診されたのである。

民家、灌漑や農耕の技術など急速な社会変化のもとで姿を消したり、形態が変わったりしているものも撮影されており、時間が経ったからこそ価値が高まった写真もある。壮大な祭礼、美しい民俗画や工芸、衣装などに関する華麗な作品も多数含まれている。是非みんぱくで受け入れデータベースとして公開する必要があると考えた。

沖氏との交渉の結果、特に思い入れの深いマザー・テレサに関するもの以外のすべてのインドとネパールの写真を寛大にもご寄贈いただけることとなった。取材の際参考にされた文献や地図、取材メモ、現地の協力者からの書簡などの関連資料も一括してご寄贈いただいております。こちらはアーカイブとして整理保存が進められている。

データベースの誕生

上記の交渉中からお宅にお邪魔したり、みんぱくに足を運んでいただいたりして取材当時のエピソードについては何度も聞きとりを重ねた。こういった聞きとり調査や氏から提供された関連資料に基づいてデータベースの作成にとりかかった。

誰しも経験することだが、写真には自分が撮影したかったものや事柄以外にも多数の情報が写り込んでくる。たとえ画面には小さく写っていても、見る人

昨年春「沖守弘インド写真データベース」がみんぱくの映像・音響資料データベースに加わり、この春にはその英語版が公開された。本特集では、沖氏に縁の深かった研究者のエッセイによって同氏とインドとのかわりの一端を紹介する。またデータベースの成り立ちや特徴を概説し、沖氏の写真の魅力やデータベースの活用術を解きあかす。



オディシャ州コナーラクの太陽神寺院。撮影1980年。（「Konarka」所収） [X0309257] Photo by F.M.Oki

では後のエッセイに詳しいが、氏は当時の日本では一部の研究者などを除きほとんど知られていなかったインドの同時代の民俗文化を積極的に撮影するようになる。これらの写真は展覧会や写真集で発表される一方、『季刊民族学』の特集を何度も飾っている。その意味で沖氏はみんぱくの活動ともかわりが深かった。

写真と資料の受け入れ

沖氏は一九九六年の取材のあと病を得て、以降はインドでの撮影をおこなっていない。幸いご自身は健在だが、撮影後相当時間の経ったフィルムもあり、その保存や整理には頭を悩ませておられた。ちょうどそのころ、二〇一二年春に福岡アジア美術館で「魅せられて、インド。」展が開催され、氏の写真も展示された。この展示を企画担当したのが本特集にも一文を寄せている五十嵐理奈氏だった。沖氏は自身の写真の収蔵と整理保存について五十嵐氏に相談、彼女からみんぱくでの



ケララ州トリシュールのブーラム祭。撮影1986年。（『インド・祭り』所収） [X0300855] Photo by F.M.Oki

が変わればそれが貴重な情報になることもある。データベースは多くの利用者がアクセスして情報を引き出し、活用できてこそ意味がある。データベース作りではそれを念頭に、沖氏が主題として撮影した人、もの、こと以外にも写り込んでいる情報を極力拾いあげ、検索が可能になるよう心がけた。そのため、左図にあるようなキーワードを設けておき、写真を一枚ずつ精査して、キーワードにかかわる情報があればすべて記録するようにした。キーワードに収めきれない情報は具体的な事項名や祭礼名などとして別に記録した。

写真の精査と情報整理には基本的に筆者があたったが、筆者には到底わからない分野や地域の写真も多数ある。その場合は、同僚の応援を仰いだり、沖氏に助言をいただいたりした。作業にはみんぱくの研究費のほか、筆者がかかわってきた人間文化研究機構「現代インド地域研究」プロジェクトの経費も活用した。小さく写っている建物や神像の名前がわからず、頭をかきむしりながら資料にあたったこともあり、データベース作成は文字どおり七転八倒の苦しみだったが、沖氏の叱咤激励もいただいていた。なんとかすべての写真情報の読み込みを終えられた。二万点以上の写真すべてと対峙できたことはじつに貴重な経験で、多くのことを学べたと思っている。

情報整理と平行して、ご寄贈いただいたスライドフィルムはすべてデジタル化した。整理した情報とデジタル画像を関連づけるなどの技術的な作業はみんぱくの情報課や関連業者の皆さんの協力によって迅速に進み、データベースは正式な受け入れから三年で公開に至った。この種のデータベースとしては異例といっているほどの速さでの公開だったが、まだまだ改善や修正の余地はある。多くの方に沖氏の写真の魅力に触れていただくと同時に、気づいた点をフィードバックしてもらい、データベースの今後の発展を見守っていただければ幸いである。



データベースのキーワード検索用画面

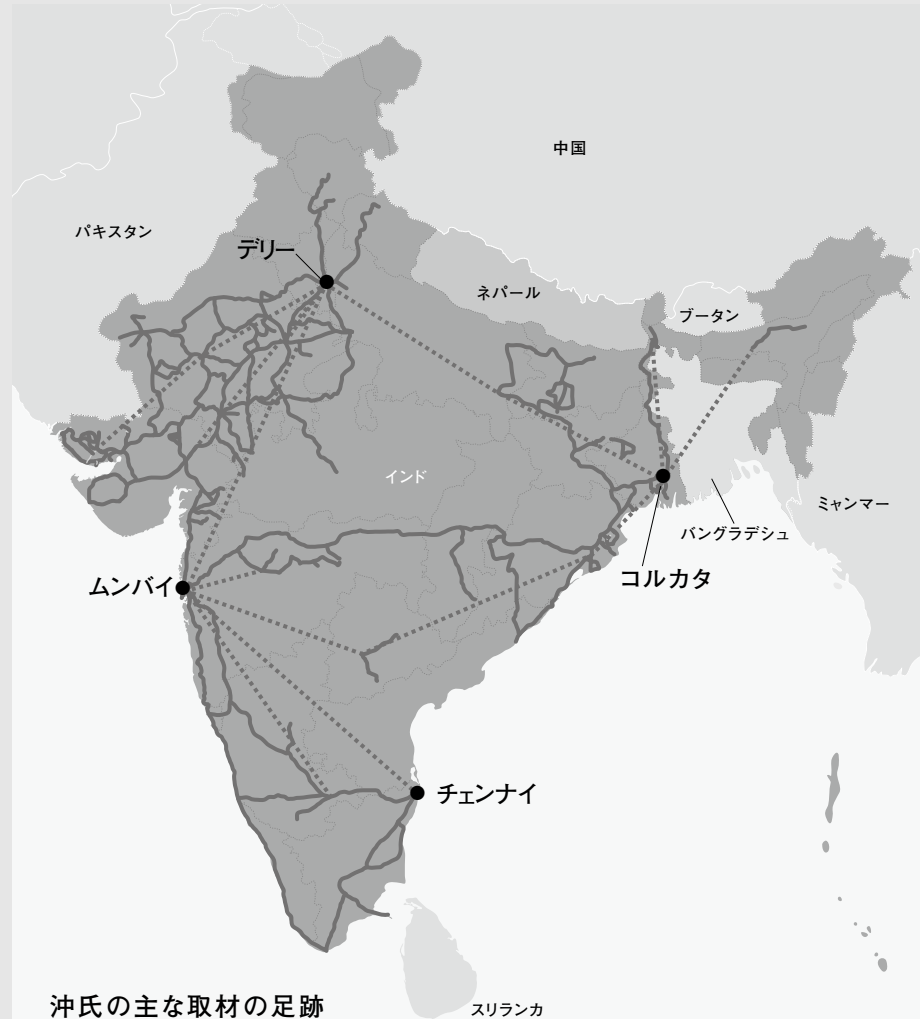
写真家 沖守弘の足跡

いがらしりな
五十嵐 理奈 福岡アジア美術館学芸員

沖守弘氏は、社会の光と影のあいだを彷徨いながら、被写体に向き合ってきた写真家である。インドの祭りを空からダイナミックに、色鮮やかな婚礼衣装の人びとを日差しに負けぬ強さで写し出す。まばゆい光をカメラに収める一方で、ファインダーを覗かないもう片方の目は、社会の影となる厳しい現実を見ていた。



撮影に使用した沖氏愛用のカメラの一部



沖氏の主な取材の足跡

この地図は沖氏の取材記録をもとに作成しています。
なお地名表記は2017年3月現在のものです。

〈凡例〉

陸路 ————— 空路 ……………

日本からインドへ
一九二九年、京都の西陣に生まれた沖氏は、父親の影響でアメリカのグラフィック雑誌『ライフ』を愛読し、少年時代には二眼レフカメラで遊んだという。戦後、近畿大学に入学し、ユージン・スミス（一九一八―七八）の「フォト・エッセイ」という組写真でテーマを深く掘り下げる手法に感銘を受け、衰退する西陣織や大阪

の新世界の労働者など社会的なテーマを取材し報道写真家を目指した。おりしも、戦後日本の写真界は報道写真全盛のころであり、「丹平写真倶楽部」に所属して写真の腕を磨いた。そして、一九五四年に『祇園寸景』の写真で全日本学生写真コンクール特選を受賞したのを機にプロの道に進んだ。
その後、上京した沖氏は、消費社会が進む

一九六〇年代には商業写真を手がけながら、「二科展写真部」でも発表を重ねた。沖氏はこのころについて多くを語れないが、商品の魅力を引き出す手腕は、後に貧困のインドに隠されたハレの姿を見出すことへつながったであろう。ローマクラブが「成長の限界」が近いと世界に警鐘を鳴らすと、沖氏は高度経済成長期の日本から人口爆発の地、インドの Kolkata へ旅立つ。一九七四年、沖氏四五歳の時のことである。難民が押し寄せスラム化し

た Kolkata に強いショックを受けた沖氏は、かつての報道写真のようにこの町を撮ることはできなかったという。だが、ここで生涯心を寄せるマザー・テレサの存在を知り、その後 Kolkata を拠点にインド各地の取材をするようになる。

インドの魅力は日本へ
当時インドの地とは、「神秘のインド」であった。ヒッピー文化の流行を背景に、高度経済成長時代の反動ともいえるべき自然主義、精神主義的な生き方を象徴する地であり、同時に貧困と差別のイメージを負っていた。しかし、



インド撮影旅の相棒、マルチ・スズキの四駆車と沖氏（1990年代前半）

沖氏が撮ったインドとは、こうしたインドではなかった。光り輝く姿を求めて壮麗な祭りを訪ね、人びとのエネルギーが最高潮に達する「ダイナミック・モーメント」

（沖氏の言葉）をカメラでとらえたのである。それは、インドが見せたいインドの姿を代弁するものでもあり、日本が空前のインドブームを迎えた一九八八年の「インド祭」において展覧会

と写真集の形で結実した。以後、四駆車に機材を積んでインドを駆けめぐる撮影が始まったのである。

こうして沖氏は、一九七四年から九六年まで、インドの光をカメラでとらえ何万枚もの写真に残した。しかし、光がつくったインドの影の姿は今もその胸にたたまたままである。

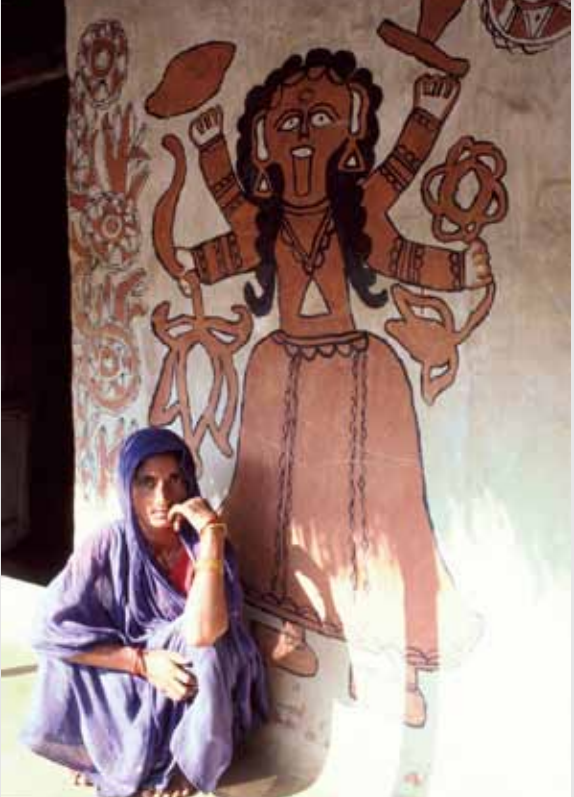


上：沖氏が写真や文章を寄せた『季刊民族学』（1980-93年）
下：沖氏が手がけた主な写真集



インドを撮る——写真家・沖守弘の冒険

こにし まこと
小西 正捷 立教大学名誉教授



ビハール州マドゥバニー様式的神話壁画。撮影年不詳。
〔インド・大地の民俗画〕所収 [X0306619] Photo by F.M.Oki

とであつたらう。

そして、心配されたとお
り、その後沖さんは体調を
崩され、病床に臥されるこ
ととなつてしまった。沖さ
んは一九七四年に初めてイ
ンドを訪れて以来、二〇年
余のあいだに八〇回以上も
同地を訪れ、ことに一九八
九年に小

型四駆の
ジープを
購入して
からは単

身深い山奥や密林、あるいは
熱砂の砂漠にわけ入り、場所
や村によってはかなり危険な
目にもあいつつも、精力的な
取材を続けてこられた。その
走行距離は、地球一周半にも
およぶ七万キロに達する。ま
た一九九六―七年には、癌の
手術直後なのに点滴のバッグ
を車椅子に吊したまままで動か



れ、その姿はまさに壮絶ともいえるものであつた。このようにお元氣なときの様子を思い出すにつけ、いま病床にあるそのご様子は傷ましいかぎりであるが、それでもお見舞いに伺ったこの春、お宅を辞すさいに、沖さんははつきりとお大声で、「アイ・ラブ・インディア!」と叫ばれたのである。

インドを撮る眼

一九七四年の渡印以前の沖さんの関心は、貧困や人口問題のような社会的問題であつた。しかし、インドのあまりに厳しい社会的実状を目の当たりにして、七五年以降の渾身の取材は、マザー・テレサの活動に向けられた。マザーは

結婚に関わる一連の儀礼を行う新郎新婦。
ラージャスターン州ジャイスアルメル。
撮影1980年代後半から90年代前半。〔“Jaisalmer”所収〕
[X0319654] Photo by F.M.Oki

沖フォト・コレクション

誰しもが歳をとると、身の回りにたまつたあれこれを整理せねばならないとのプレッシャーにさいなまれることになる。沖さんもそうで、これまでにインドで撮りためられた数万枚の写真のうち、彼を世界的に有名にしたマザー・テレサ関係などを除く約二万枚のスライドのすべてがこのほど民博に寄託されたと聞いて、一抹の安堵と寂しさを禁じえなかつた。それはまた、決断を下された沖さんにとってはそれ以上のこ

カトリックの修道女であるが、キリスト教の宗派はもとよりヒンドゥー教の因習とも戦いつつ、ただひたすらに神と人への愛から、死を待つばかりの老人・病人、身寄りのない寡婦や幼児を文字どおり抱きしめての介護にあたつた。沖さんによるマザーの取材はやがて欧米や日本でも知られるようになり、八〇年代に入つてからはバルセロナのサグラダ・ファミリア聖堂やアツシジの聖フランチェスコ聖堂などからも招待されて、ヨーロッパ各地での展示がなされた。

一方、沖さんが一貫して求めてやまなかつたインドの真の姿は、これまであまり紹介されることのなかつた辺地・奥地の部族民の芸能や儀礼、豊かな民俗造形のうちに求められた。一九四―九五五年にかけてのその精力的な取材は、共同著作に向けての最終的な図版の選択とレイアウトなどを含めて、二〇〇年以上も前の一七八一年に建つたというカルカッタのコロニアル様式のホテルに長期滞在しての、小西との連日連夜の協議で実行された。わたしにとつても思い入れの深い計四冊の共著(*)は、こうして成つたのである。

*『インド・大地の民俗画』未来社、二〇〇一年。『知られざるインド 儀礼芸能とその造形』清流出版、二〇〇七年。Konarka: Chariot of the Sun-God, D.K.Printworld, New Delhi, 2007; Jaisalmer: Life and Culture of the Indian Desert, D.K.Printworld, New Delhi, 2013.

沖氏の写真がとらえたもの

三尾 稔 民博グローバル現象研究部

ガドリア・ロハールはラージャスターン州の移動民で、ウシの引く荷車に家財道具を積みみたく々をめぐり歩く暮らしを送っている。村はずれに数日間とどまり、農具の修理などの鍛冶仕事をして生活の糧としている。言い伝えでは、かつてこの地方にあつたメーワール王国の都がムガル帝国に攻略されたとき、彼らは都が奪回されるまで二度と定住しないと誓つたという。彼らをヨーロッパの移動民ロマの祖先とみなす説もあるが、

確証はない。

写真はその一世帯が鍛冶仕事をおこなっているところ。画面中央で撮影者に話しかけているのが一家の中心世代の男性で、左隣でもち運び式のふいごを回しているのがその妻だろう。男性の父母は画面左端に座っている。鉄槌を振り下ろすのは中央の男性の息子で、画面左に立つ若い女性はその妻らしい。若夫婦は撮影と聞いてちよつとおめかししているようだ。後方には木と麻縄で作つたベッドで遊ぶ幼児も写っている。その脇には飲料水の素焼き壺が置かれ、荷車には寝具や調理具が積んである。よく見ると壺の後ろに照明用のランプがつり下げられている。楽しそうな様子とともに彼らの質素な生活が一枚に収められている。

ガドリア・ロハールの日常を伝える写真は世界的にも貴重だ。沖氏の写真の中心は華麗な祭礼や工芸だが、庶民の多様な暮らしよりも多数撮影されていて見るものを飽きさせない。



撮影年不詳 [X0317125] Photo by F.M.Oki

沖守弘インド写真データベース活用方法

三尾 稔 民博グローバル現象研究部

みんなのホームページのホーム画面下方にある「データベース」バナーをクリックしてこのデータベースに入る

と沖氏の写真の特徴などを簡単に解説したトップページ

(<http://htq.minpaku.ac.jp/databases/india/japanese/>)

検索はここから二つの方法でおこなえる。

インド地図から検索

ひとつは地図から検索する方法だ。トップページ

の「地図で選ぶ」をクリックするとインドの州別地図画面が出る(図②)。沖氏が撮影をおこなった州は赤地に白抜きで示されている。沖氏は二二もの州や連邦直轄地(およびネパール)で撮影をおこなったこと



図②

図上の州番号か州名をクリックすると該当する写真のすべてが順に表示される(図③はケララ州の例)。画面左上の番号が矢印をクリックすると写真選択画面が変わる。見たい写真をクリックするとより大きな写真と基本データが表示される(図④)。

図④の写真をクリックすればさらに大きなサイズの写真が見られる。

キーワードでクロス検索

写真の効率的なしぼり込みに活用したいのがキーワード検索だ。トップページから「キーワードで選ぶ」をクリック(三ページのデータベース画面参照)。ここから複数のキーワードを組み合わせた検索ができる。例えば「西ベ



図③

ンガル州」「神像仏像など」「祭礼」を選び、「検索」をクリックすると三つのキーワードをすべて含む写真が表示される。表示された写真群からは地図検索と同じ方法で写真を閲覧できる。キーワードはひとつでもよいし、増やすこともできる。ただしソフトの制約で大項目のなかからは複数のキーワード(「男性」と「高齢者」など)は選べない。

フリーワード欄に事項名を入れた検索も可能だ。

例えば「ホーリー」と入力し、各地のホーリー祭の比較もできる。フリーワード欄の横の?マークをクリックすると検索用語を探すヒントが表示される。既存のキーワードとフリーワードの組み合わせ検索も可能である。

データベース上の写真の転用にはみんなの許可が必要だ。みんなの民族学資料共同利用窓口までお問い合わせいただければ幸いである。データベースにはまだ場所が特定できないなど情報が不完全なものもある。今後もより良いものを目指して努力してゆきたい。ご覧いただいで気づいた点をご指摘いただければ大変ありがたい。



図④

ラクダ部隊と「小学生新聞」

上羽 陽子 民博人類文明誌研究部

「ラクダ部隊の写真が手元がない」。みんなの研究者が連載をしている「毎日小学生新聞」で調査地のラクダの毛利用や、今後のラクダ飼いの暮らしについて書くとしたときだった。昨年、作成に協力した「沖守弘インド写真データベース」を思い出し、「ラクダ」と検索してみた。すると、インド西部のラージャスターン州のラクダ市やお祭り、ラクダの飼養などの写真のなかに、ラクダ部隊の写真を見つけた。

インドはヒトコブラクダ飼養圏の最東に位置し、その数は約三八万頭といわれている(二〇一三年統計による)。わたしの調査地、インド西部グジャラート州カッチ県にも多くのラクダ飼いが住んでいる。ラクダのオスは、乾燥した地域において自動車やトラックの代わりに、運搬用として使役されてきた。現在は、舗装された道路が増え、自動車が走れるようになったが、燃料代の方が高くなってしまいう安価な商品作物などは今でもラクダの後ろに台車を付

けて運んでいる。

統計によると一九八〇年以降、インドのラクダの飼養数は徐々に減ってきているが、今でも一定量は飼養され続けている。理由には、ラクダ部隊がある。インド西部の乾燥地帯は、パキスタンとの国境地域に位置するため、国境の警備時に警察や軍隊がラクダに乗って移動する必要がある。インドの共和国記念日には、軍隊による盛大なパレードがおこなわれる。沖氏が撮影した写真は、共和国記念日のラクダ部隊の写真であった。現在の過剰にラクダが裝飾されている部隊ではなく、ラクダと兵隊による一糸乱れぬ行進の姿であった。まるで、有事があればすぐにでも駆けつけられるかのようである。

わたしの専門は、牧畜民の家畜の毛利用をはじめとした染織研究である。今ではなくなってしまう天然素材や、工業製品にかわってしまった当時の衣装や日常用品など、沖氏の写真には、手工芸に關係する貴重な写真もたくさんある。一方、七十年代から変わらぬ使い続けている染織品や道具が多くあることも写真から見とれるため、物質文化研究においても重要な記録である。多くの研究者にも活用していただきたい。



沖氏が撮影したインドラクダ部隊のパレード。撮影1984年 [X0300240] Photo by F.M.Oki

〇〇してみました世界のフィールド

済州島と在日済州人の過去・現在・未来

ながた あつまさ
永田 貴聖
民博 機関研究員



在日済州人の絆について考えてきました
在日済州人センター入口

済州島にある在日済州人センターは、島と在日済州人をつなぐ活動をしている。センターの一角にある「功德碑」の展示を観覧し、済州島と在日済州人の未来に思いを馳せた。

済州島を離れた人びと

現在、わたしは、日本と韓国においてフィリピン人移住者が集まる「空間」や教会の自助グループなどで調査をしている。関西を拠点にフィールドワークをしているとフィリピン人やブラジル人などニューカマー外国人移住者と積極的にかかわる在日コリアンによく出会う。そのなかには済州島がルーツであるという人たちがかなりいる。済州島から日本にやって来た人たちの多くは大阪に到着し、現在に至るまで大阪で暮らしている。そこで、今年二月に本館の海外研究動向調査で、済州島と在日済州人の過去・現在・未来をつなぐ役割をはたしている、済州大学校・在日済州人センターを訪れた。

済州島と在日済州人をつなぐ「功德碑」

二〇二二年に設立されたセンターでは、済州島出身の在日コリアンと済州島の過去から現在までのつながり、海外に移住したさまざまなコリアンルーツの人びとの動向に注目している。センターがある建物の屋上からは漢拵山が一望できる。この山は国立公園にも指定され、島の美しい自然環境を特徴づけている。それでは、一階のギャラリーに入ってみる。最初に目に入るのが、『君が代丸』の模写である。これは日本植民地時代に済州島から大阪まで就航し、多くの出稼ぎ労働者を乗せた定期船である。さらに奥へ進むと、戦後、人びとが日本（大阪）において生業としたホルモン焼店の模型、日本植民地支配期の渡航証明など貴重な資料が公開されている。これまでの展示品は比較的身近なものである。しかし、なぜか、ギャラリーのさらに



専任研究員金泰植氏（右側）が資料について説明

過去から現在、そして未来へ向けて

朝鮮半島の最南端に位置する済州島は、朝鮮半島本土とは異なる独自の文化が継承されている。現在、島は観光地としても有名であるが、悲劇的な事件が起った暗い過去がある。日本敗戦後の一九四八年四月三日、反体制運動に参加したとされる多くの島民が殺害された。これが『済州四・三』である。殺害されたなかには運動に参加しなかった島民も多く含まれ、残った人びとの多くは弾圧を避けるため、日本に逃れた。

「済州四・三」のあと日本に渡った人びと、それ以前の日本植民地期に日本に渡った島民の大半が大阪に暮らし、戦後混乱期の貧困や、旧植民地出身者への差別や社会的排除などから、苦しい生活を強いられた。しかし、済州人同胞は団結し、互いの生活を支え合った。

センターでは、在日済州人と済州島のつながりだけではなく、過去から現在、そして未来への地域的な関係の広がりや想定した研究活動が展開されている。二〇二三年、研究報告書『済州と沖縄』が刊行され、周辺島嶼部を含む東アジア地域の移動と交流について検討されている。

在日済州人センターは、在日済州人が島内出身地に寄付した証である「功德碑」の精神を受け継ぎ、済州島と在日済州人の過去・現在・未来、さらに、済州島と周辺地域のつながりを探る試みを展開している。

（掲載写真はすべて二〇二七年一月に撮影）



上：ギャラリーにある「君が代丸」の模写
下：再現されたホルモン焼店

韓国、済州島
★

奥には、複数の碑のようなものがある。これらはいったい何なのか？ 今回の訪問でお世話になったセンターの専任研究員である金泰植さんが説明してくれた。在日済州人たちは島内にある出身の町村に寄付をおこない、町村はその返礼として、多くの「功德碑」を建立したということであった。これらの碑はその「功德碑」の模型だったのである。センターでは、済州特別自治道（済州島を含む行政区）の協力と資金援助のもと、碑の数、形態などに関する実態調査を続けている。「功德碑」は現在の在日済州人たちと済州島の絆が形となったものであると見てよい。



功德碑の模型

**開館40周年記念特別展
「ビーズ—つなぐ・かざる・みせる」**

飾り玉、数珠玉、トシボ玉などを総称するビーズ。本展示では、私たち人類がつくり出した最高の傑作品の一つとしてビーズをとらえて、つくる楽しみ、飾る楽しみをおして日本や世界の人びとにとってのビーズの魅力を紹介いたします。

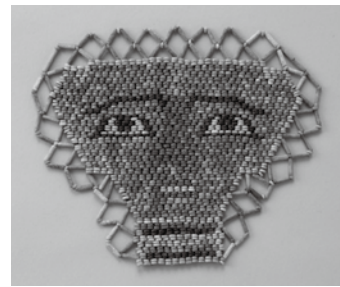
体験コーナー

タチヨウの卵の殻でできたビーズのアクセサリーなどをさわったり、タカラガイなどの自然素材をビーズとしてつなげたりする体験ができます。

日時 特別展会期中

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)

会期 6月6日(火)まで
会場 特別展示館



ミイラのビーズマスク(エジプト)

**■関連イベント
ギャラリートーク**

「ビーズをもっと深く知るためのギャラリートークを開催します(各回30分程度)。
会場 特別展示館

6月3日(土)

①11時

アフリカのガラスビーズ
講師 中村香子(京都大学)

②12時30分〜15時

ビーズと織物
講師 吉本忍(本館 名誉教授)

6月4日(日)

①11時/13時
ビーズでつながってきた世界
講師 池谷和信(本館 教授)

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
※タイトルは変更になる場合があります。

開館40周年記念特別展

「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」

シーボルトが終焉の地ミュンヘンに残したコレクションをとおし、民族学博物館の父とも呼べるシーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえります。

会期 8月10日(木)〜10月10日(火)
会場 特別展示館



花鳥図衝立
ミュンヘン五大陸博物館蔵
©Museum Fünf Kontinente, Munich (MFK)

音楽の祭日2017 in みんなく

1982年にフランスで、夏至の日にみんなくで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりました。みんなくでも、世界のさまざまな楽器を使って「音楽の祭日」を祝います。

日時 6月18日(日)10時25分〜16時35分
(10時開場)

会場 特別展示館 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料(展示をご覧になる方は、展示観覧券が必要です)

企画課「音楽の祭日」担当
06・6878・8210
お問い合わせ先

公開講演会

「メソアメリカとアンデスの古代文明と現在」
メソアメリカのテオティワカン文明とアンデスのナスカ文明を発掘調査する考古学者などが、最新の研究成果をもちより、古代アメリカ文明について議論します。

日時 7月1日(土)14時〜17時
(開場13時30分)

会場 本館第4セミナー室(定員50名)
※申込不要、参加無料、先着順

みんなくミュージアムパートナーズ

「点字体験ワークショップ」

目で読む文字から手で読む文字へ、点字で異文化コミュニケーション! 点字体験ワークショップを開催します。

日時 6月10日(土)12時〜15時30分
会場 本館エントランスホール
※申込不要、参加無料

カレッジシニア

「地球探究紀行」

開館40周年にちなみ、本館展示の地域区分(12地域)ごとに、地球に暮らす人びとの多様な営みを紹介します。

時間 13時〜14時30分
会場 あべのハルカス近鉄本店「スペース9」

※要事前申込(参加状況により当日受付あり)、
参加費1000円、定員各回50名

主催 産経新聞社
共催 近鉄文化サロン、スペース9
特別協力 国立民族学博物館、千里文化財団
6月14日(水)
ドイツのパンを味わおう
講師 森明子(本館 教授)

6月28日(水)
豊かに老いる社会
— アメリカやヨーロッパの事例から
講師 鈴木七美(本館 教授)

お申し込み・お問い合わせ先
ウエブ産経カレッジシニア係
06・66333・9087

●みんなく無料シャトルバスのご案内
大阪モノレール「万博記念公園駅」とみんなくとの間の直通無料送迎バスを特別展「ビーズ—つなぐ・かざる・みせる」の会期中に運行します。

運行日 6月6日(火)までの土曜・日曜・祝日
1日11往復、所要時間10分、無料
運休日 平日

※万博記念公園でイベントが開催される場合は臨時に運休することがあります。詳細は本館ホームページをご覧ください。

国立民族学博物館発		大阪モノレール万博記念公園駅発	
時	国立民族学博物館 →万博記念公園駅	時	万博記念公園駅 →国立民族学博物館
10	50	10 06	36
11	20	11 06	36
12	30	12	46
13 00	30	13 16	46
14 10	40	14 26	56
15 10	40	15 26	56
16	30	16	
17 00		17	

※各イベントについてくわしくはみんなくホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は、9時〜17時(土日祝を除く)です。

みんなくセミナー

時間 13時30分〜15時(13時開場)
会場 本館講堂

定員 450名(当日先着順)
参加費 無料(展示をご覧になる方は展示観覧券が必要です)

つなぐられる移民

講師 三島禎子(本館 准教授)

近年アフリカからヨーロッパへ渡る人びとに注目し、フランスをはじめとするEUの移民政策や、先進各国の移民の定義の差異について概観しながら、「移民」という存在について考えます。



パリ清掃局の制服姿をしたセネガル人

**みんなくウィークエンド・サロン
研究者と語る**

※申込不要、参加無料(要展示観覧券)
本館の研究者が「現在取り組んでいる研究」調査している地域(国)の最新情報「みんなく」の展示資料について分かりやすくお話しします。

6月4日(日)14時30分〜15時 本館ナビひろば
直前解説
—音楽の祭日を100倍楽しむ法

話者 出口正之(本館 教授)

6月11日(日)14時30分〜15時15分 本館ナビひろば
—建築人類学者はなにをめざす

話者 佐藤浩司(本館 准教授)

6月25日(日)14時30分〜15時15分 本館ナビひろば
—世界都市ランキングと大阪

話者 太田心平(本館 准教授)

刊行物紹介

■上水流久彦、太田心平、尾崎孝宏、川口幸大 編
『東アジアで学ぶ文化人類学』

昭和堂 2,200円(税別)

東アジアを中心にフィールドワークする研究者が、それぞれのフィールドから文化人類学の基本を解説する。日本を含む東アジアは大きな変動の中にあり、国家間の関係も変化しつつある。文化人類学的立場から、東アジアを冷静に見つめる視点を養う。

邦題：レドゥクション
—ペルー副王領における先住民の強制的集住化

教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会 100ペルーソル

本館の機関研究として実施された国際共同研究の成果。本書は、今日の南米の先住民の社会と文化の基本構造を形作ったといわれている16〜18世紀の強制的移住政策の実態解明に大きく貢献しており、今後、同テーマの必読書となると期待される。

友の会

**新館長就任記念!
大阪と東京で講演会を実施します**

文明の転換点における博物館

講師 吉田憲司(本館 館長)
人類の文明は、いま、大きな転換点を迎えているように思われます。従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団のあいだに、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯が至る所で起こるようになってきました。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、相互の違いを超えてともに生きる世界を築くための知が求められています。このような時代における博物館の役割についてお話しします。

大阪 第468回友の会講演会

7月1日(土)13時30分〜14時40分
会場 本館第5セミナー室
※当日先着順(定員96名)、会員無料(会員証提示)、一般500円

東京 第119回東京講演会

7月15日(土)13時30分〜14時40分
会場 モンベル御徒町店4Fサロン
※要事前申込(定員60名)、会員無料、一般500円
※両講演会とも終了後、講師を囲んで懇談会(40分)をおこないます。

第469回友の会講演会

8月5日(土)13時30分〜14時40分
—みんなく名誉教授シリーズ
民族学で解く千里ニュータウンと大阪万博
講師 中牧弘允(吹田市立博物館館長、本館 名誉教授)

第75回体験セミナー

「川とともに生きる—日本の鵜飼探訪 第2弾」
三次の鵜飼漁見学と広島県の民俗芸能に出会う
講師 卯田宗平(本館 准教授)
葉杖哲也、田邊英男(ともに、広島県立歴史民俗資料館学芸員)

日時 7月22日(土)、23日(日)
(申込締切 6月15日(木))

資料名 ナワルの木彫
標本番号 H0268518
地域 メキシコ
サイズ 縦 24 × 横 95 × 高さ 77
<small>※サイズの単位はセンチメートルです</small>

想像界の生物相

ナワル

民博 人類文明誌研究部 すずき もと 鈴木 紀



そしてキチエの子どもたちは、もし動物を殺せば、その動物をナワルとする人物から恨みをかうと教わることで、動物との共生という価値を学んでいくという。

つまりナワルには、動物に変身するシャマンと、人間の分身動物という二つの意味があるといえる。どちらも先スペイン時代以来の信仰だが、学術的には、本来のナワルは前者で、後者はトナルという別の概念だとする説が有力である。ただし現代の先住民族のなかには、両者を融合させて独自の概念を形成している場合もある。例えばメキシコのオトミ民族のあいだでは、人間の分身動物という考え方が広く受け入れられているだけでなく、人が病気になる一因は、その人の分身動物が邪術師（他者に災いをもたらす者）の分身動物から攻撃を受



鹿（左）とナワル（右）のアレブリーヘ（メキシコ民芸美術館、2010年）

けているからだとい信じられている。そんなとき、シャマンの治療が効果を上げるのは、シャマン自身の分身動物が、攻撃を仕掛けている分身動物を退治するからだ。

◆◆動物をとおりて人間社会を見る◆◆
 ところでナワルになるのはどんな動物だろうか。メソアメリカ全体の傾向を指摘することは困難だが、マヤ系の先住民族に住むメキシコ、チアパス州のチャムラ集落では興味深い事例が知られている。政治的有力者や有能なシャマンの分身は、ジャガーやコヨーテなど肉食で夜行性の動物であるのに対し、一般の人は、ウサギやリスなど草食や雑食の動物を分身動物とする傾向があるという。さらに注目すべきなのは、邪術師が通常の分身動物に加えて、牛や羊、豚などの家畜の分身もつと考えられていることである。家畜はありふれているので、攻撃対象の人間に、それとは気づかれずに接近することができるからだ。ナワルをシャマンと解釈するにしても、分身動物と解釈するにしても、メソアメリカの先住民族の人びとは、動物の特徴をよく観察し、その特徴を人間に投影することで、人間の側の社会関係をよりよく理解しようとしていることは確かである。

みんなくのアメ리카展示場の「創る」セッションには、アレブリーへと総称されるメキシコ南部オアハカ州の動物木彫が展示されている。鮮やかな色に塗られた動物たちのなかでも一際目を引くのはナワルである。全身真っ赤な四つ足の体だが、顔は人間だ。白黒の二本の角と黄色く長い耳を持ち、耳と鼻のあたりからフサフサとした白い髭が生えている。作者のアンヘリコ・ヒメネス氏によれば、ナワルとはシャマン（スペイン語のクランデーロ）のことで、その呪力で病気を治すだけでなく、動物に変身することができるという。この作品は、その角と髭の特徴から明らかになようにヤギに変身したナワルを描いたものである。

◆◆ナワルをめぐる信仰◆◆

ナワルは、メキシコから中米地方にかけて広がるメソアメリカ地域の先住民族のあいだでよく知られた存在である。ところがその意味は、地方によって異なる。例えば、一九九二年にノーベル平和賞を受賞したグアテマラのキチエ民族の人権活動家リゴベルタ・メンチュー氏は、自伝のなかで、ナワアル（ナワル）とは、誰もが生まれながらにもつ、人に寄り添う影のようなもので、たいてい動物の形をしていると述べている。

新世紀ミュージアム

一世紀以上前のケルン市に、非ヨーロッパの諸文化を紹介する施設として誕生した市立の民族学博物館。移転をきっかけに、二〇一〇年に大きく生まれ変わった。新しいものと古いもの、身近なものともめずらしいものの出会いを来館者に五感で体験させる展示をおして、自文化を相対化し、多文化共生社会がはらむ諸問題を解決する視点を提示する。

舌を噛みそうな名前であるが、地元では略称の RJM とか、Weltkulturen Museum (世界文化博物館) とよばれている。カタカナで正式名を書くこと長いので、RJM を使うことにする。二〇一二年には欧州評議会博物館賞を受賞しており、個人的にも今まで見てきた博物館のなかでトップ3 に入らない、好きなミュージアムである。

ルーツと再生

この博物館の出発点となったのは、ケルン出身のドイツ民族学者ヴェルヘルム・ヨスト(一八五二―一九七)が世界中を旅して集めた民族資料である。彼の死後、コレクションを受け継いだ姉のアデル・ラウテンシュトラウフが、弟と夫の苗字を冠した名前にすることを条件に最初の博物館建設経費を出資し、一九〇六年に

開館した。同じくケルン出身の考古学者マックス・フォン・オッペンハイマー(一八六〇―一九四六)の資料もここに所蔵されている。

古いコレクションをもつヨーロッパの民族学博物館の悩みは、所蔵品が年代物と化して、建物自体も由緒があり、資料的にも空間的にも歴史に制約されているという点である。しかし RJM は比較的最近、建物ごと生まれ変わり、展示の文脈を再構成し、現代社会の視点をとり入れることに成功している。

再生の過程は決して単純なものではなかった。そもそも移転のきっかけは、災害である。旧博物館は一九五五年に起こったライン河の大洪水によって地下収蔵庫がかなりのダメージを受け、カビの被害がひどくなり維持が難しくなった。ケルン市

徹底した通文化展示

みんなくをはじめ、世界の民族学博物館は地域別の展示がされることが多いが、RJM は再建の際に地域ごとの展示区分をいさぎよくとっ払い、地域横断的なテーマ別の展示方針を貫いた。テーマとしてとりあげられているのは、「扉」、「住まい」、「衣服と装飾」、「死と死後の世界」、「信仰」などである。セクションによってはさらにサブ・テーマに分かれており、人間の営みの共通性と多様性を文化の比較によって見出すしくみになっている。

「住まい」のセクションの例を挙げると、トルコ、カナダ、ニジェール、ニュー

ギニア島などの伝統的な住居が再現さ



引き出しを開けると、テーブルの上に移住に関するトピックが展開する仕掛け
ATELIER BRÜCKNER/Michael Jungblut 撮影

れており、さらにセクションの中央の空間には、ヨーロッパ風の大きなダイニングテーブルがどんとある。席について引き出しを開けると、「移住」、「ラップ音楽」といったグローバルな現象にかかわる品物がなかに入っており、さらにテーブル上の地図に映し出されるイメージや音でトピックの解説が展開する仕掛けになっている。引き出しごとに中身が違うので、席を移って試してみるのが楽しい。

巧みな展示手法

みんなくのリニューアルの際にも、モノを見せたい、でも背景情報も十分に提供したいという博物館学的なジレンマに悩んだのであるが、RJM はその問題を一工夫凝らした展示手法でうまく解決している。文字情報や画像パネルと展示資料のバランスがよく、パネル類がモノ自体を見るときは邪魔しないように配慮されている。また、電子端末やメディアの使い方が、とにかく「粋」である。前述のダイニングテーブルの引き出しのように、どれも機械っぽさがなく、さりげない仕掛けなのである。ボタンを押す、タッチパネルを触るといったような操作でなく、引き出しを開ける、本のページを



保存や修復など博物館学的な課題に触れる展示の部屋もある
ATELIER BRÜCKNER/Michael Jungblut 撮影

が主導し移転計画が立ちあがったが、紆余曲折を経て、現在の場所にあらたな建物が建設され、移転が完成したのは二〇一〇年である。

新しい博物館では、原点にある一九世紀の学者たちの活動を「東洋趣味」、「植民地主義」と非難するのではなく、当時の収集の歴史的な文脈を導入部で紹介し、ヨーロッパと世界の関係の歴史をきちんと見せている。また他民族に対する差別や先入観を真っ向からとりあげ、来館者に自分たちの立ち位置や視点を最初に意識させる流れになっている。



キャプションの横にあるボタンを押すと、ケースの背面に写真や解説が表示される。表示なしの状態、資料自体をじっくり見ることできる
ATELIER BRÜCKNER/Michael Jungblut 撮影

めくるというようなアナログな動作がスイッチになっていたり、みんなくはビデオテープや電子ガイドのような「メカメカしい」装置を得意としてきたが、次世代の情報展示を作る際には、RJM のさりげなさも参考になるかもしれない。

キュレーションを担当する専門研究スタッフは現時点で七人だけであり、機材自体にもそれほどお金はかけていないと聞いた。展示デザインを手掛けたのはアトリエ・ブリュックナーという設計会社だそうである。優れたデザインと優れた学芸スタッフの比較的小ぢんまりとしたチームが知恵を絞って作りあげた、秀逸な博物館である。

編み込まれた記憶——パプアニューギニアの網袋製作から

新本 万里子しんもと まりこ 広島大学大学院社会科学部科学研究科 研究員



農作業用の網袋をたずさえて、ヤムイモの運搬に向かう女性たち(2009年)

手芸品には、自分の楽しみのためばかりではなく、誰かにあげてくれることを前提に、その人を思いながら製作されるという側面がある。もらった人は作り手を思い出すことになる。パプアニューギニアで製作される網袋には、どのような記憶が編み込まれているのだろうか。

村に住んでいた。でも、高地に帰ってしまっ
た。KKスタイルとかマウンテン・レインボー
とかいうデザイン」

パプアニューギニア、東セビック州のマブ
リック町近くのN村で、ある一家の網袋につい
て聞きとりをしているときに、ナムという二
十代前半の女性が話してくれた一節である。
ナムの住んでいる東セビック州は、地理的に
はパプアニューギニア北部に位置する。

友達の出身地である高地とは、パプア
ニューギニア中央部に位置しており、
飛行機か船とバスを乗り継がなければ
行くことができない。友達は、父親が
マブリック町で仕事をしていたため、町
から近いN村のゲスト・ハウスに家族
と一緒に滞在していたのである。KK
スタイルやマウンテン・レインボーは



朝早く、網袋をもって仕事に出かけるナム。この朝ナムが選んだのは姉妹の網袋。姉妹間での貸し借りはめずらしくない(2016年)

ナムの網袋コレクション

「これは高地出身の友達に編んでもらったもの。わたしがアクリル毛糸を買って渡し、彼女が編んでくれた。彼女は以前、N

んでいる。友達の方から「編んであげる」と言われて編んでもらった網袋もある。

網袋を編めない世代

若い世代では、ナムのように網袋の編み方を知らない女性が増えつつある。もともと網袋は、樹皮の内側の繊維を撚って作った糸で編まれていた。しかし、機械で撚りのかけられたナイロン製の糸が販売され、農作業用の網袋はその糸で編まれるようになった。また、ナムの網袋のような私物を入れる小型の網袋は、アクリル毛糸で編まれるようになった。さらに、近年では、既製のナイロン製穀物袋が販売され、農作業用の網袋の代用とされるようになった。工業製のバッグを、小型の網袋の代わりに携行する女性も出てきた。網袋を編むことは、女性たちにとって生活を営む上で必須の技術ではなくなったのである。

アクリル毛糸を購入する

網袋を編んでもらうとき、ナムがしたように、アクリル毛糸を買って編み手に渡すということがある。調査を始めたばかりのころ、「姉」とよんでいる女性の網袋をみせてもらっていたときのことだった。「編んであげるよ。何色がいいの？ 毛糸を買っておいで」と姉は言った。わたしは少々面食らった。網袋を編んでほしいと頼んだわけではないから



ナムの網袋コレクション。上段左端の網袋が、高地出身の友達が編んでくれたもの(2016年)

だ。わたしにとって「編んであげる」とは、編む人が自分で毛糸を購入して編み、できあがった網袋をくれることを意味している。なぜわたしが毛糸を買うのか腑に落ちないままマブリック町に行き、毛糸を購入し、それを姉に渡した。すると姉は、「来年ここに来るのは何月？ 編んでおいてあげるから」と言った。翌年再訪すると、網袋はできあがっていた。パプアニューギニアの人びとにとって、「編んであげる」といわれて毛糸を購入することは不思議なことではない。ナムの網袋のなかにも、友達の方から「編んであげる」と言われた網袋がある。そのように言われて毛糸を買いに行ったことや、ときには友達と一緒に毛糸を探しに行ったことをナムは当然のこととして話す。

編み手との関係の記憶

日本に帰国してからも、姉が編んでくれた網袋をみるたびに、わたしは姉を思い出した。一方、姉もまた網袋を編みながら、毛糸を預けたわたしのことを思い出していたはずである。パプアニューギニアではしばしば、人びとは何かしらのモノをもらうことによって人間関係を構築しようとしているように見える。「編んであげるから毛糸を買っておいで」と言われても、毎回購入するわけにもいかない。恐る恐る断ることもある。しかし、断っても何も起らない。毛糸を買うことによつて始まるであろう関係が、始まらないだけのことである。毛糸をもらった編み手は、それをくれた人を思いながら編んでいく。そして依頼者の手元には、毛糸のお返しであるかのように網袋が返ってくる。アクリル毛糸を購入するという貢献をわたしがし、それに手を加えて網袋にするという貢献を姉がする。姉が編んでくれた網袋には、二人で座って網袋の話をし、わたしが毛糸を買いに行き、姉が編み、そして再会したという記憶が積み重なっている。ナムの網袋の一枚一枚にも、そんな関係の記憶が編み込まれているのだ。パプアニューギニアの網袋には、編み手の記憶ばかりではなく、わたしも一緒にそこにいたという記憶が編み込まれている。

(写真はすべて東セビック州マブリック地区N村にて撮影)

意味か？ 音か？



What's in a name?

稲澤 努
いなざわ つとむ

尚綱学院大学准教授

英国の植民地だった影響で、香港では競馬が盛んにおこなわれている。日本でも最近国際レースの馬券が買えるようになったので、香港競馬の存在を知る方も増えたかと思う。

競走馬は、国際的にアルファベット一八文字以内で命名することが定められており、日本ではアルファベット一八文字以内、かつカタカナ九文字以内で命名登録される。香港でもアルファベット一八文字以内というのは同じだが、それと同時に漢字四文字以内で中国語名を登録する。

香港では、英字新聞であればアルファベットの馬名が、中国語新聞であれば中国語名が使用される。テレビでのレースの実況も、英語のものと中国語（広東語）のものがあり、中国語放送では、中国語名を使って実況する。日本など外国から香港に遠征してきた馬にも中国語名がつけられるし、凱旋門賞やジャパンカップなどの海外レースの馬券を香港で発売するときにも出走馬に中国語名がつけられる。これが結構面白い。

中国語名のつけ方を大きく分けると、意味から漢字をあてたものと、音をもとに漢字をあてたものがある。意味から漢字をあてると、コスモバルクは「大宇宙」になり、アサクサデンエンは「浅草田園」になる。ステイゴールドの「黄金旅程」などはなかなか格好良い。これらは漢字を見ればまあ納得だが、広東語で「浅草田園（チンチョウティンユン）」と連呼されても、

外国人にはまったくピンとはこない。

逆にモリスの「満楽時（マンロックシー）」、ウォーサンの「威信（ワイサン）」などは、広東語で読んだときに元の音と近い漢字があてられているので、字だけを見てよくわからないが、広東語実況を聞くとこれはモリスのことだな、となんとかわかるのである。

日本人の騎手は「武豊」「福永祐二」と漢字で表記され、広東語で「モウホン」「フックインヤウヤツ」と呼ばれる。欧米人騎手の場合、ホワイトは「韋達（イター）」、モレイラは「莫雷拉（モリヨイラー）」といったように、音に基づいて漢字名をつけている。

英語名と中国語名が別々に存在する、というのは中華圏では普通のことである。例えば、わたしは中国語名「稲澤努」で、北京語では「タオズー・ヌウ」、広東語なら「ドウザツ・ノウ」と呼ばれる。英語名を書けと言われたら、*hazawa Tsutomu* と書く。

優先するのは、漢字か音か。わたしは「稲澤」を「タオズー」と読まれようがドウザツと読まれようが構わないのだが、なかには「おれはスズキ（鈴木）であって、リンムーなどではない」と首をかしげる方もいる。

アフリカから中国に留学にやってきたサンデー君は、中国語の授業で中国語名をつけられ、日曜日の意味する「星期天」と命名された。彼はそれが大いに不満であった。「おれはサンデーなんだ。星期天（シンチーティエン）じゃない」と。「莫雷拉」のように音の似た漢字名だったら彼も納得できたのかもしれない。

編集後記

国立民族学博物館は、約35万点の標本資料を抱えている。それほど知られていないかもしれないが、7万点を超える映像・音響資料がある。そしてそれらのうち整備が済んだものは、わざわざ来館しなくてもホームページ上で閲覧ができるように一般公開されている。最近では、「アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション」「西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション」が公開された。

本特集は、そうした映像・音響資料のうち「沖守弘インド写真」をとりあげ、そのデータベースコレクションとしての魅力を紹介した。沖氏の写真は、これまで『季刊民族学』の誌面を飾り、160号ではインド写真としての魅力に迫る特集が組まれているので、本号では、写真自体の魅力はもちろんのこと、データベースとしての特徴や研究資料としての貴重さなどについて焦点を当てた。本号を見て興味をもった方は是非、本館のホームページでデータベースをご鑑賞頂きたい。そして、読者それぞれが沖氏の写真からあらたな見所や価値を発掘して頂ければと思う。(丹羽典生)

●表紙：左上から、X0301677、X0304392、X0308795、X0316635、X0306959、X0306757、X0300257、X0301585、X0300832、X0301523、X0314788、X0301161、X0305152、X0300248、X0305159（撮影者 沖守弘）

次号の予告

特集

異国をまとう(仮)

みんぱくをもっと楽しみたい 人のために—会員制度のご案内

国立民族学博物館友の会

本館展示の無料入館や特別展示の観覧料割引にくわえ、『月刊みんぱく』や会員機関誌『季刊民族学』などの定期刊行物や、毎月の友の会講演会、セミナーなどを通して多様な文化の情報を提供しています。

みんぱくフリーパス

1年間、本館展示へ何度でも無料で入館いただけます（特別展示は観覧料割引）。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

国立民族学博物館キャンパスメンバーズ

みんぱくと大学等教育機関との連携を図り、文化人類学、民族学にふれる学びの場を提供することを目的とした会員制度です。

詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
 (電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

月刊みんぱく 2017年6月号

第41巻第6号通巻第477号 2017年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
 電話 06-6876-2151

発行人 園田直子

編集委員 丹羽典生(編集長) 寺村裕史 三島禎子
 南真木人 山中由里子 吉岡乾

デザイン 宮谷一欒 長岡綾子

制作・協力 一般財団法人 千里文化財団

印刷 能登印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅から近鉄バスで「万博記念公園駅(エキスポシティ前)」 「日本庭園前」下車、徒歩約13分。
- 乗用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

みんぱくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

みんぱくフェイスブック

<https://www.facebook.com/MINPAKU.official/>

みんぱくツイッター

<https://twitter.com/MINPAKUofficial>



国立民族学博物館
 National Museum of Ethnology

みんなのほくぶつかん みんなぱく

MINPAKU

池澤夏樹さんのトークイベントがみんなぱくで開催されました

4月29日（土）、みんなぱくが舞台の一部として書かれた小説『キトラ・ボックス』（KADOKAWA）の刊行を記念し、著者の池澤夏樹さん（小説家）のトークイベントが、菅谷文則さん（奈良県立橿原考古学研究所所長）、吉本忍さん（国立民族学博物館名誉教授）を招いて開催。小説に登場するキトラ古墳やみんなぱく、また未知への探究のスタンスなどをテーマに、それぞれ小説家、研究者の立場からトークが繰り広げられました。

はじめに池澤さんより、『キトラ・ボックス』の構想段階から完成に至るまでのエピソードが語られました。あるとき、考古学ミステリー小説を書きたいという思いにかられ題材を探していると、池澤さんがむかしからよく足を運んでいたみんな

ぱくが脳裏に浮かんだといいます。また、かねてから交流があった吉本さんの研究熱心な姿勢にも感銘を受けていたため、その姿を投影した学者を『キトラ・ボックス』に登場させようと決めたのもこのときだったそうです。

むかしから知的好奇心が旺盛で、気になることがあれば自分の足で現場に赴き、とことん調べるという池澤さん。研究者がどのように研究対象の素材を集めているのかにも関心があり、長年フィールドワークをおこなってきた菅谷さん、吉本さんの経験談に興味深い様子で耳を傾けていらっしゃいました。最後に、来場者からの質問にも笑顔で応じておられ、終始和やかな雰囲気の中にイベントは幕を閉じました。



トークイベントの様子。右から池澤夏樹さん、吉本忍さん、菅谷文則さん



トークイベントの前には、吉本さんが参加者にウイグル絨（かすり）織物について解説した